臨床心理学の視点から見たリンドグレーンの生涯と作品

青　木　真　理

はじめに

アストリッド・リンドグレーン（1907-2002）はスウェーデンの児童文学作家で，その作品は長年にわたり世界中で読まれ，人気を維持している。本論はアストリッドの生涯と作品，ことに『やかまし村』に焦点をあて，臨床心理学の視点から論じる。

1.　アストリッド・リンドグレーンの家族

アストリッド・リンドグレーン Astrid Anna Emilia Lindgren は，1907 年，スウェーデン南部スモーランド地方，ヴィンメルビー郊外ネースにて誕生した。ネースの農場主サムエル・エリクソンとハンナのあいだに 4 人同胞（グンナル，アストリッド，スティーナ，インゲエード）の第 2 子，長女として生まれた。

両親は，終生，仲がよかったとアストリッドは回想する[1)]。

母ハンナは,「やわらかな手の」ロヴィーサ（アストリッドの祖母）譲りの性格で，近所の貧しい高齢者への気配りを欠かさなかった。アストリッドの『エーミル』シリーズの母親の行動にそれが反映している。また,「凛とした威厳」があった，ともアストリッドは書いている。1961 年 81 歳で死去した。

父親サムエルは,「お話好き」で，農場の作男だった時代の話をアストリッドに話してきかせた。それが『エーミル』シリーズに反映している。アストリッドは，自身を「パパの子」と言い,「私ほど，父を愛した人はないと思います」とも述べる。

児童文学の臨床心理学的評論の先駆けである河合隼雄『子どもの本を読む』[2)] で，河合は，アストリッドの『長くつ下のピッピ』をとりあげて,「父の娘」としてのピッピを論じている。「父の娘」はユング派がいう元型のひとつで，その典型は，父ゼウスの頭から飛び出して誕生したアテネーである。アストリッドが「パパの子」と述べているのを考えると，ピッピと同様，アストリッドもまた「父の娘」元型の影響を強くうけた人物であったといえるだろう。『子どもの本を読む』が出版された 1978 年当時はアストリッドの伝記に相当する書物は日本では出版されておらず，アストリッド本人について書かれたのは，岩波書店から出ていたリンドグレーンの作品集の訳者あとがきで，訳者の大塚勇三や尾崎義らが書いていたものなどであった。伝記資料のないなかで，アストリッドの作品のピッピを「父の娘」元型として論じたことは，まことに慧眼と言わざるを得ない。

父の娘としてのアストリッドについて，のちほど再度ふれる。

父は 1969 年 94 歳で死去した。

2.　子ども時代

アストリッドは子ども時代を振り返って「“遊び死に” しなかったのは不思議なくらいでした」[3)] と述べる。「幸せな子ども時代のための決定的なふたつの条件として安心と自由」が両親によってあたえられていた。『ピッピ』にはピッピが床に下りない遊びをするというエピソードが登場するが，それはアストリッドの子ども時代の遊びの実体験だったという。ベッド，たんすの上を四人の子どもたちは走り回った。そういう行儀の悪い遊びも，許される家庭であった。

学校でのアストリッドは，国語・作文の成績が優秀であったという。『愛蔵版アルバム』の中のアストリッドは，写真の端のほうに，ちょっとおどけた風体で映っている。その姿からは，ユーモアがあり，しかし集団の中心からは少し距離をとる少女という印象を受ける。

3.　黄金の子ども時代の終わり～苦難の思春期

その黄金の子ども時代は，突然終わる。

アストリッドは10代はじめに「ふいに遊ぶ気持ちが消え失せ，子ども時代は終わったと，おそろしいことに気付いた」[4]。続く思春期は，苦難の時代になる。

13歳の少年少女が登場する『カッレくん』シリーズは，探偵にあこがれるカッレとその親友の少年アンドレ，少女エーヴァ・ロッタの3名が様々な事件にまきこまれる話である。エーヴァ・ロッタはパン屋の娘で，活発でカッレとアンドレとともに，「バラ戦争」にあけくれている。3人は白バラ軍で，ペッテら3人の男子から成る赤バラ軍と長い戦いを戦っている。エーヴァ・ロッタのパパは彼女のことがかわいくてたまらない。パパが焼く甘いパンを山のように食べても，エーヴァ・ロッタは針のように細く，その運動能力は男の子たちと比べて遜色ない。シリーズ第2作『カッレくんの冒険』でエーヴァ・ロッタは殺人事件に遭遇する。高利貸しのグレンじいさんの死体を発見するのである。その後，屈託のなかったエーヴァロッタの表情には，かげりがみられるようになる。アストリッドの思春期の憂鬱が，エーヴァロッタの表情のかげりに反映しているように思われる。

思春期のアストリッドは「気をまぎらわすために，わざと粗野な振舞いをし」，「はた目にはひどく愉快そうに見えたかもしれませんが，心の中はかなしみでいっぱい」[5] だった。

アストリッドは15歳で義務教育を修了した。長い髪を切り，新しい髪形のボブヘアにする。

16歳で，父親の紹介で，地元紙ヴィンメルビー新聞に就職する。18歳で妊娠し，相手はヴィンメルビー新聞社編集長49歳，既婚者であった。この事態に父は「災難はひとつで，充分だ！」と言ってアストリッドが編集長と結婚しないことに同意し，母は「いつも通り落ち着いた態度で，『ほかには言わないでおきましょう』と言っ」た。アストリッドは，「家族に恥をかかせないために」首都ストックホルムで下宿住まいを始めた。1920年代の北欧で，何らかの事情を抱えた妊婦が出産するのに条件が整っていたのはコペンハーゲンだったらしい。1926年12月4日，コペンハーゲンで出産し，生まれた息子にラッセと名付ける。アストリッドはラッセをコペンハーゲンの養母に預けてストックホルムで働き，週末コペンハーゲンとストックホルムの間を往復する生活を送る。今でこそストックホルムとコペンハーゲンのあいだは飛行機で1時間足らずであるし，コペンハーゲンとスウェーデンのあいだは海底トンネルが通って船に乗る必要がないが，当時は陸路でスウェーデン南端のマルメまで行き蒸気船でコペンハーゲンに向かうのに14時間近くかかった。金曜日の夜20時15分に夜汽車に乗り土曜日の朝10時頃コペンハーゲンに到着。一日半をラッセと過ごし，日曜日の夜19時半にストックホルム行きの汽車に乗り，月曜日の朝8時56分にストックホルムに到着する。3年のあいだストックホルムとコペンハーゲンのあいだを14往復した。『愛蔵版アルバム』には，たくさんの出入国のスタンプが押されたアストリッドの当時のパスポートの写真が掲載されている。

4.　子ども時代の輝きの再発見　その1

アストリッドはストックホルムの下宿で同じような境涯の女性たちと親しくなる。その友人らの子ども時代の話を聞くにつれ，アストリッドは自身の子ども時代が恵まれたものであったことに気づく。いわば，この時代，アストリッドは，子ども時代を再発見したといってよいだろう。

5.　結婚，出産

ストックホルムで働きながら秘書の勉強をした

アストリッドは，1927年，20歳で，王立自動車クラブに秘書として就職した。その後，コペンハーゲンの養母が病気になりラッセを育てられなくなったのでアストリッドはラッセを引き取る。アストリッドの妊娠に「ほかには言わないでおきましょう」といった母ハンナは「ラッセはうちの子ですもの」と言ってラッセをネースで預かることを提案し，ラッセは実家のネースで暮らすことになった。1930年5月，アストリッドとラッセはネースに旅立った。二人の帰還を『愛蔵版アルバム』は次のように描写する。ラッセは「帰ってきた放蕩息子が大切に迎えられるように，温かく迎えられた。汽車の駅まで，無蓋馬車で迎えにきてもらったアストリッドは，ゴシップ好きの小さな町の中を，顔を上げ同道と馬車で通っていった」。アストリッドは「町の人は，結婚して生まれた子供を誇らしげに釣れる母親と同じように，未婚の母親が子供と一緒に誇らしく人前に出るのに，慣れていなかったのね」とのちに語っている。無蓋の馬車，ということは，道中，人々の好奇な目にさらされたことを意味するし，「放蕩息子」へのなぞらえは，町の人々がアストリッドを「放蕩」とみなしていたであろうことと，その中で家族がアストリッドを温かく迎えたことを意味している。その後2人の妹たちが，ラッセの母替わりとして面倒を見た。

ラッセがネースで暮らすようになる前の1929年，22歳の時，アストリッドは甲状腺機能亢進症の手術を受けた。甲状腺機能亢進症は易興奮性，抑鬱，活動性低下などの精神症状を伴うことがあるので，アストリッドの十代初めの突然の憂鬱は，この病気のせいであったかもしれない。

王立自動車クラブでアストリッドは夫となるステューレ・リンドグレーンと出会う。彼はこのクラブの支配人で既婚者であったが，1929年には妻と別居し，翌年1930年に離婚し，1931年4月にアストリッドと結婚した。妻との別居，離婚は，アストリッドが要因であっただろうと思われる。

1931年に23歳でステューレと結婚したアストリッドは，ラッセをひきとってストックホルムで3人で暮らし始める。1934年，26歳のときには娘カーリンが誕生する。

ステューレは1952年に大動脈出血により53歳で死去した。アストリッドはのちに「彼のことはとてもとても好きだった」「でも，魂を奪われるほどじゃなかった」と述べている。

6. 母としてのアストリッド，子ども時代の輝きの再発見　その2

アストリッドは子育て時代をふりかえり，「根っからの母親らしい性格だった」と述べ，息子のラッセと娘のカーリンは「バリバリ音がするほど」子どもたちを愛していたと述べている。長男ラッセと木登り，ブランコ，滑り台などで遊んだ。おとなになったラッセは「他のお母さんとはちがってたよ」「自分も遊びたがってたからね」と述べた。氷の丘を段ボールを敷いて滑り，スカートに穴をあけたというエピソードも紹介されている。長女カーリンは「母は独創的な人でした」と述べている。「私ほど子どもっぽい人はいないかもしれない」というのは，アストリッドの80代後半の述懐である。

子育てをしながらアストリッドは自身の子ども時代を再体験していたようである。そして十代において輝きを失った子ども時代が子育てを通じて再び輝きをとりもどしたのだと思われる。

7. 物語作家としてのスタート

カーリンが7歳（アストリッド33歳）のとき，肺炎になり，長い間ベッドに寝ていなければいけない生活に退屈して母に物語をねだった。それはPippi Lotta Långastrump というお話をしてほしい，というものだった。長くつ下のピッピ・ロッタ，という意味である。カーリンは英国の児童文学作家ジーン・ウェブスターの『あしながおじさん』（英国で1912年発表）を読んでいた。スウェーデン語であしながおじさんは，Pappa Långben パッパ・ロングベーンと訳されていた。それをもじって，Pippi Lotta Långstrump ピッピ・ロッタ・ロンガストルンプという主人公の名前をカーリン

は思いついたのである。先に述べたように，河合は，父親的な男性像へのあこがれを描いた『あしながおじさん』と同様，ピッピも「父の娘」元型を生きる主人公の物語であると指摘した。

その数年後，アストリッドは氷ですべって足をくじきしばらく外に出られなくなり，そのとき，カーリンに語ったピッピのお話をタイピングした。この原稿をアストリッドは出版社に持ち込んだが，あまりに規格外れの主人公と物語に，出版社はすぐには原稿を受け取らなかった。一方，物語の懸賞に応募して入賞した『ブリットーマリはただいま幸せ』は公刊の運びとなり，アストリッドはこの本によりでデビューし，同時に，この本を出版したラーベン＆ショーグレン社に就職，作家と編集の二足のわらじをはくことになる。この活動のありかたは，日本の石井桃子と似ている。石井桃子は岩波少年文庫の編集に携わり，『クマのプーさん』（A.A. ミルン）をはじめとする欧米の児童文学の翻訳に務める一方，『ノンちゃん雲にのる』などの創作も行った。また，石井桃子とアストリッドは同じ年 1907 年の生まれである。

最初出版社に受け取ってもらえなかった『ピッピ』も 1945 年にラーベン & ショーグレーン社より公刊され，たちまち人気を得た。アストリッドはやがて 1946 年，ラーベン＆ショーグレーン社の児童書編集長になった。編集の仕事と並行して数多くの自著を出版した。巻末に，アストリッドの主な作品をあげておく。

8.　物語の源泉

アストリッドが物語を生み出す源泉を考えてみたい。まず，子ども時代のアストリッドに影響を与えた人たちをとりあげる。

グンナルはひとつ上の兄で，アストリッドは「もの発見家」と評する。いろいろなことを思いつく活発でユーモアにあふれた少年だったようである。グンナルの姿は『やかまし村』のラッセとボッセに映し出されているようだ。

上の妹，スティーナはアストリッドの一番の遊び相手で，この二人の関係は『やかまし村』主人公のリーサと同い年のアンナの関係に反映されている。

エリクソン家で雇われていた牛世話係のクリスティンの娘，エディトは，物語作家となるアストリッドに多大な影響を与えた。エディトはアストリッドより少し年上であった。母クリスティンの台所で，『巨人バム-バムと妖精ヴィリブンダ』を四歳のアストリッドに読んできかせた。そのときのことをアストリッドは「その瞬間，わたしに，本に対しての熱いあこがれが生まれた」「この幸せは，わたしの子どもの魂を，いまだに揺りうごかしつづけています」[6] と述べている。書きことばの世界，本の世界は，家族によってではなく，家の使用人の娘によって拓かれたのである。

父がアストリッドにきかせた少年時代の話は『エーミル』シリーズに結実した。父は，アストリッドの作品の中で特に『エーミル』シリーズを好んでいたようである。

父方祖母はお化けの話をアストリッドに話してきかせた。

終生の友，アン・マリーは，あだ名をマディケンと言った。『おもしろ荘の子どもたち』シリーズの主人公はマディケンで，この親友とその家族がモデルとなっている。

ネースの家には時々仕事を手伝いにくるおばあさん，イーダとマリがいて，この人たちをモデルとする人物が『エーミル』に登場する。

そのほか，放浪者，行商人，包丁研ぎ師，といった流浪の人々との出会いもあった。『やかまし村』では子どもたちが，浮浪者ごっこをするエピソードが出てくるが，それもまたアストリッドの子ども時代の経験に基づくものであった。

学校で貧しい家の子どもが教師から手ひどい体罰を受けたという経験は，アストリッドの中に強く残り，暴力の否定という思想として結実する。それはドイツの書店協会から賞を受けその記念として行った講演の中に現れている。この講演は『暴力はぜったいダメ！』[7] というタイトルで日本でも近年翻訳が出版された。

ネースの家の近所には貧しい人々もいた。母は

その人たちに気をかけて，クリスマスなどにおいしいものをつめた籠を子どもたちにもっていかせた。そのことは，『エーミル』や『やかまし村』の中のエピソードとしてあらわれる。

ストックホルムの下宿時代の友人が恵まれない子ども時代を送ったことを知ったことも，つらい境遇にある子どもへの関心と同情をはぐくんだことであろう。

以上が，アストリッドにとりわけ影響を与えたと思われる人々である。ついで，アストリッドが愛読した本をあげてみる[8]。

トム・ソーヤー，宝島，ジャングル・ブック，ガリバー旅行記，あしながおじさん，ロビンソン・クルーソー，千夜一夜物語，ニルスのふしぎな旅，ジュール・ヴェルヌ，小公女，赤毛のアン，地下のハット王子，鉄拳をもつ男あるいは勇士たちの王，アンデルセン童話集，アンクルトムの小屋などである。

岩波少年文庫に入っている物語に下線を施した。岩波少年文庫は太平洋戦争直後から公刊されはじめた。以下に岩波少年文庫について，岩波書店のウェブサイトに記された紹介文を掲載する[9]。

> 岩波少年文庫は，終戦後まもない1950年のクリスマスに創刊されました。最初の書目は『宝島』『あしながおじさん』『クリスマス･キャロル』『小さな牛追い』『ふたりのロッテ』の5冊。創刊にたずさわった石井桃子さんは，海外で長く読みつがれている作品から，自分にとって「喜びの訪れ」と感じられる本を選びぬき，編集し，少年文庫の礎を築きました。
>
> 70年のあいだ，古今東西の名作を美しい日本語で届けるという基本姿勢はそのままに，リニューアルや新訳への切り替えなども経ながら刊行を続けてきた少年文庫。幸いにして3世代にわたる多くの読者に愛され，収録作品数は460を超えました。

1950年に創刊された岩波少年文庫は，1940年代以降に生まれた子どもたちに海外の児童文学との出会いを与えた。アストリッドの愛読書のうち下線を引いた作品が岩波少年文庫におさめられているということは，日本の子どもたちは，スウェーデンで1900年代に生まれたアストリッドと，40年以上の時間差をもって，同じ児童文学を享受したことになる。1960年代生まれの筆者も同様である。こと，児童文学については，私たちはアストリッドとの同時代性を有することになる。

9.　子どもが好き！動物が好き！

『愛蔵版アルバム』には，子どもたちと過ごすアストリッドの写真が多くおさめれている。自身の子ども，孫，ひ孫に加え，アストリッドの原作の映画，またアストリッドが脚本を担当した映画に出演した子どもたち，市井の子ども・青年とともに過ごす様子が映し出されている。子どものみならずおとなたちもうれしそうにアストリッドと一緒に写真におさまっており，その中にはスウェーデン王室の人たちや政治家もいる。ロシアのエリツィン大統領もその中のひとりである。

アストリッドは，70年代から子どもの権利を守る運動に積極的に取り組むようになった。1978年にドイツで行ったスピーチ「暴力は絶対だめ！」[10]（ドイツ書店協会平和賞受賞時のドイツ語のスピーチ）は，感動をもって迎えられた。翌年，スウェーデンで体罰を禁じる法律が世界で初めて設けられたことに，このスピーチは影響を与えた。

また“生産物”としての動物の解放を目指す運動にもとりくみ，劣悪な環境で飼育される豚，鶏などについて，飼育環境の改善を訴えた。

10.　アストリッドの人生と作品

ここまでアストリッドの生涯を概観してきた。その生涯と生み出した作品について，考えてみたい。

民主的で「安心と自由」を保障した父母との暮らしは，たとえば『やかまし村』シリーズを生み出した。『エーミル』シリーズは，父の子ども時代，農場にやとわれていた時代の話をもとに紡がれた。『おもしろ荘』シリーズは，親友マディケン，

アストリッドの妹のスティーナをモデルにしている。また，親友の父をモデルとする主人公の父親は社会派の新聞記者として描かれる。

一方で「安心と自由」を保障されていない人々へのまなざしがアストリッドの作品にはある。それは, 17 歳で故郷を去ることになった, いわば「失楽園」体験，遠くコペンハーゲンで生んだ長男，ラッセとの分離体験がそれらに影響を与えていると思われる。

アストリッドの作品には，明るくて楽しいお話とかなしいお話の二系統がある。同じ作家が書いたとは思えないほど，この二系統の物語は異なる印象を与える。かなしい運命の子どもたちの物語はたとえば『ミオよわたしのミオ』『小さいきょうだい』などである。アストリッドは「あの子（筆者註，長男ラッセのこと）の泣き声が私の中で，いつもいつも響いているのです。どんな状況においても，私が我を忘れて子どもの味方をしてきた理由は，この泣き声にあるのだと思います」と回想している。

また，迷信や世俗的な話，アニミズムの影響もそこここに見られる。『やかまし村』では，ザリガニ釣りでキャンプをするとき，ラッセがトロルがそこらにいる，とリーサをおどかすエピソードがあるが，怖いものへの恐怖と魅惑は，おそらくお化けの話をしてくれた父方祖母や，定期的に手伝いにくるおばあさんたちなどから伝えられたものであろう。両親よりもやや遠くに，それらを伝えてくれる大人たちがあった。

11.　子ども時代の喪失，その回復と作品の創造

12 歳のとき迎えた転換は，アストリッドの人生と作品に大きい影響を与えている。彼女は，急速な意欲喪失と抑鬱を経験した。先述したように，『カッレくん』のエーヴァ・ロッタは原っぱで男の子たちとバラ戦争に明け暮れる活発で積極的な少女だったが，グレーンじいさんの死体発見を機に，その表情に陰りが生じるようになる。もう曇りのない子ども時代は終わったのである。死体発見のショックから立ち直りまたバラ戦争に参加するようになるエーヴァ・ロッタではあるが，ふと，グレンじいさんの口癖だった「いいんだ，いいんだ，子どもの楽しい遊びなんだ！楽しい，無邪気な遊びなんだよ，そうだ，そうだ！」を口にしてしまい，またもや暗い表情になるのだった。『やかまし村』のおじいさんの口癖「ほう，ほう，そうだ，そうだ！」は，リーサたちの話に耳を傾け，リーサたちの発案に同意するときの頼もしく温かい口癖だが，字面を見れば似ているように見えてグレン爺さんの口癖は，なんとも不吉である。

アストリッドの最後の長編物語となった『山賊のむすめローニャ』は，バイキング時代のロミオとジュリエット物語で，ローニャは，対立する一族の息子と恋仲になったため，生まれ育った家を出る。アストリッドが故郷を離れたことに比べると，自分の意思で選んだという色合いが強い。そしてローニャが楽園を出ることが，対立する二つの集団を結び付けることになる。

アストリッドは故郷に対してアンビバレントな思いをもっていたようである。ヴィンメルビー新聞の 1924 年の「放浪の旅」記事に次のように書いている。「大好きなヴィンメルビー，（中略）でも神様，どうぞ永久にここに居ることにはならないように・・・」

楽園の居心地の良さと，そこに囲い込まれる窮屈さを感じていたのではないだろうか。

アストリッドは，12 歳の冬を越せない不安をもっていた。いわば「12 歳危機」とでもいうべきことを経験していた。「父の娘」であるアストリッドが新しい自分の人生を生きるためには，楽園から大きく遠ざかることが必要だったのかもしれない。

12.　ピッピと「力」

ピッピは，世界一力持ちな女の子である。大金持ちで，ひとりで住んでいる（サルのネルソン氏と馬はいるが）。アストリッドは，ピッピについて次のように語る[11)]。

「もし，私が，ピッピというキャラクターに，

子どもの読者を面白がらせようと思う以外に特別な意図を込めたとするならば，力を持ちながらも，その力に振り回されないことが可能であるということを示したかったのだと思います。おそらく，それが人生でいちばん難しい課題でしょうから。力はいたるところで乱用されています。（中略）でも，ピッピは親切です！ピッピは世界中のどの子どもよりも力を持っていて，大人も子供も怖がらせることができます。でも，ピッピはそうしたでしょうか？いいえ，ピッピはそんなことはしません。ピッピは親切で手助けを惜しまず，気前がよくて，本当に必要なとき以外は厳しい態度はとりません」

暴力・権力・能力・・・・人間にとっての力（光と影，多面体）の意味をアストリッドは考え続けた。

そのことは，先述した『暴力は絶対ダメ！』の講演の中にはっきりと述べられている。

13. 『やかまし村』という世界

1）『やかまし村』シリーズ

『やかまし村』シリーズは，『やかまし村の子どもたち』，『やかまし村の春・夏・秋・冬』，『やかまし村はいつもにぎやか』の3巻から成るシリーズで，それぞれ，1947年，1949年，1952年に出版された。日本では，3冊とも1965年に大塚勇三訳により岩波書店から出版された。その後，岩波少年文庫から新訳が出ている。

先述したアストリッド作品の二系統でいうと，明るく楽しい物語群の代表的なものである。アストリッド自身の子ども時代を下敷きに「遊んで，遊んで，遊」ぶ子どもの世界を描いている。

やかまし村は家が3軒だけの小さな村で，家はそれぞれ北屋敷，中屋敷，南屋敷と呼ばれている。中屋敷はラッセ，ボッセ，リーサの3きょうだいがいて，末娘のリーサがこの物語の主人公で語り手である。第1巻でリーサは7歳，第2巻で8歳，第3巻で9歳になる。ラッセはリーサの2歳上，ボッセは1歳上である。北屋敷にはブリッタとアンナの姉妹がいて，アンナはリーサと同い年，ブリッタのその1つ上である。南屋敷にはオッレという男の子がいて，第1巻では一人っ子だったが，第2巻でケルスティンという妹が生まれる。それぞれの家に父母がいて，北屋敷には高齢でほとんど目が見えなくなったおじいさんがいる。おじいさんは，やかまし村の住民みんなにとっての“おじいさん”でもある。

物語は子どもたちの日常を描いていく。6人の子どもたちは，隣の「大村」にある学校に毎日長い距離を歩いて通う。大村の学校とて小さな学校で，先生はひとりしかいない。

2）子どもの興味を中心に描く

子どもの興味あるもの，ことが，具体的に網羅されている。たとえば，リーサの関心あることは次のようなことである。

自分ひとりで使える部屋がほしい
きれいでかわいいもののコレクション
人形のお母さんになること
お母さんのようにケーキを焼きたい
友だちと秘密の手紙交換をしたい
男の子には秘密を教えてあげない
きょうだいは頼りにもなるがうっとうしい
夏至の日の将来のおむこさん選び

リーサ，ブリッタ，アンナの女の子チームが共通に関心をもっているのは

秘密の手紙の交換をする
男の子には秘密を教えてあげない
夏至の日の将来のおむこさん選び

男の子も女の子もみな共通で関心をもっているのは

秘密基地：秘密の小屋，干し草小屋のほらあな，
ハレの日にはおとなも子どもに戻って遊ぶ：クリスマス，ザリガニパーティ，そり遊び

などである。

筆者がこの物語と出会ったのは小学校1年生の時，すなわちリーサとほぼ同じ年齢の時であった。自分が好きなもの，関心のあること，あこがれていることが網羅されていることに大変驚いた記憶がある。この作家は私の生活を知っているのだろうか，とさえ思ったものである。そしてたちまちこの物語に夢中になったのだが，あまりに具体的に自分の関心世界がそこに開陳されているので，一時はむしろ距離をとりたいと思ったほどであった。

作家の小川洋子はパーソナリティを務めるFMの番組「パナソニック・メロディアスライブラリー」[12]でこのシリーズをとりあげ，アストリッド・リンドグレーンのことを「子どものプロ」と評した。言いえて妙である。アストリッドは自分の子ども時代の世界，またはその後出会ったたくさんの子どもたちの世界をよく観察してよく認識したのだと思う。その観察と認識の結果があますことなく表現されたのがやかまし村の世界であると思われる。

3）多彩な登場人物

やかまし村に住む子どもは6人だけだが，物語には様々な登場人物を見ることができる。

親たちはごく控えめに登場する。リーサの両親は7歳の誕生日には，リーサのための部屋を用意し，家具をつくり，じゅうたんをつくってくれた。その部屋の掃除を怠ると，お母さんは，「なまけのリーサだよ」と注意をする。雨が降り続いて退屈なリーサには「私だったらカステラを焼くけれど」「私だったら椅子にペンキをぬるけれど」とさりげなくアイデアを示唆する。大雪が降って子どもたちが学校から帰るのに難儀をしたときは，お母さんは勘を働かせてお父さんにそりで迎えに行くよう頼んだ。

お父さんは，そのように子どもたちを迎えにいく頼もしい存在であるが，一方で，子どものように遊びに興じる一面もある。雪の日，子どもたちが坂でそりすべりをしていると，3人のお父さんたちは自分にもそりを貸してくれと言ってすべりだし，いつまでもやめない。

クリスマスの日にリーサの親戚の家にやかまし村住人みんなで出かけた折は，おとなも子どもも一緒になってゲームに興じる。

オッレが犬のスヴィップのために心を砕くエピソードでは，オッレのお父さんはスヴィップの飼い主に交渉して犬を買い取ってくれる。

そのように，親たちは少し距離をおいたところから子どもたちを眺め見守り，必要なときは助力を提供したり，また指導助言をしたりもする。時には子どものような面も見せる（主にお父さん）。

この村の唯一の高齢者である北屋敷のおじいさんは，住民みんなのおじいさんである。子どもたちはおじいさんの部屋をしばしば訪ねて思い思いに過ごす。男の子たちはもっぱらおじいさん所有の道具を貸してもらって鉛の兵隊を作ったりする。女の子はおじいさんのために新聞を隅から隅まで読んであげる。リーサがいうには，男の子は適当に記事を飛ばして読むので，おじいさんは女の子に読んでもらうほうが好きなのである。おじいさんの誕生日にはやかまし村の3つの屋敷の人たちが集まってお祝いをする。

リーサとアンナが「家出」を計画したとき，おじいさんにだけその計画を打ち明ける。おじいさんは制止せず，厳しい生活を強いられた子ども・若者だった時代に家出した自身のエピソードを物語るのである。

家族周辺にはほかのおとなもいる。リーサの家には女中のアグダと作男のオスカルが住み込みで雇われていて，子どもたちはこの二人が互いに好きあっていると考えていてよくからかう。この人たちとともにいることで子どもたちは青年期の大人の世界をのぞき知るのである。

隣町の学校は女の先生がひとりいるだけである。電話もない時代，地域なので，先生が風邪を引いて休校になったときもそのことをやかまし村に知らせるすべがなく，子どもたちは到着して初めて事態を知った。しかし子どもたちはすぐに帰らず，先生の世話をしてから帰宅し，また，翌日

も先生のお休みは続くということだったので，また学校にきて世話をしたい，と申し出，了承されて，翌日は「くちゃくちゃになったベッドのなかでとてもオートミールをほしがってい」た先生に，要望を叶えてあげる。その翌日は先生は回復して通常の学校になったため，子どもたちの先生のお世話は2日間で終わった。子どもたちはもう少し長く先生の病気が続くといいのにと考えた。通常は教えを受け世話をされる子どもたちが世話をする側にまわるという，役割の転換は，子どもたちにとっても先生にとっても新鮮なできごとで，非常に教育的なできごとであったともいえるだろう。

家族以外のおとなで，特筆すべき人物は，靴屋のスネルさんである。スネルさんは，やかまし村と大村の真ん中あたりの一軒家に住んでいる。あたりには家はなさそうである。スネルというのは，「親切な」という意味なのに，皮肉なことにこの男性は「親切」とは正反対の，いつも不機嫌で，偏屈な人物である。しかし靴屋はこの一軒しかないので，やかまし村の人たちはスネルさんにお願いするよりほかない。そして子どもたちはいつも学校の行きかえりにスネルさんの前を通る。女中のアグダの靴の修理が終わったとき，スネルさんは子どもたちに声をかけ，靴をもってかえるように言った。ラッセが靴を受け取る。しばらくいくと，春の雪解け水で池のように水浸しになった牧草地に出会い，子どもたちはそこで海賊船ごっこを始める。遊びに興じるうち「助けて！」と叫ぶ子どもたち。それを真に受けたスネルさんはやってきて，池の真ん中の岩にのぼった子どもたちをひとりずつ道に放り出してくれた。1度ならずも2度までも同じことが起こる。そこからすると，スネルさんは意外に親切なのではないかという気もしてくる。先述した大雪の日，子どもたちはスネルさんの家に避難し，そこにリーサのお父さんがそりでやってきてくれた。その点でもスネルさんは子どもたちの大いなる助けにはなっている。もっとも自分だけが食事をして子どもたちには何も与えなかったが。

スネルさんと子どもたちのかかわりで，もっともすばらしいエピソードは先述したオッレとスヴィップの話である。スヴィップはもともとスネルさんの犬で，いつもつなぎっぱなしの扱いを受けていた。「子どもと犬はなぐってやらなければならない」がスネルさんの口ぐせである。子どもたちが前を通りかかると吠えるスヴィップを，リーサはいやな犬だと思っていた。しかしオッレだけは「いい犬だね」と話しかけ，肉付きのほねをもっていったりもしていた。あるときスネルさんは骨折してしまい，ふだんから手をかけていないのに輪をかけてスヴィップの面倒を見なくなった。オッレはスヴィップをかわいそうに思い，勇をふるってスヴィップの世話をさせてほしいと申し出た。スネルさんは，やれるものならやったらいい，あいつはおまえののどの飛びつくぜ，と言ったが，スヴィップはオッレにうれしそうにじゃれかかった。それからオッレは毎日スヴィップと過ごす。オッレがスヴィップを洗うのをほかの子どもたちは見物したし，一緒に学校へも行った。やがてスネルさんの足がなおり，スネルさんは番犬としてのスヴィップを返すようにと要求する。それからしばらくオッレとスヴィップは引き離されてつらく悲しい日々を送る。息子のあまりのかなしみように，オッレのお父さんは，スネルさんに交渉してスヴィップを買い取ってくれた。その日からまたスヴィップはいつもオッレとすごすようになり，毎日オッレを迎えに出る。しかし，決してスネルさんの家まではやってこない，とリーサは締めくくる。

このエピソードでスネルさんは悪者，敵として描かれているが，オッレの勇気をひきだし，スヴィップとの温かい交流をもたらしたのもまたスネルさんである。村はずれに一人で住んでいるところからすると，社会との接触を最小限にしておきたいという人物で，いわば周縁に位置する人物といえよう。子どもたちからすれば不親切で恐怖の対象であるが，子どもたちの成長を我知らず後押ししているといってよいだろう。

森のわきのクリスティンもまた村はずれの森の

脇にすむおばあさんで，クリスマスにリーサの母親が食べ物のプレゼントを子どもたちに届けさせるところを見るとおそらく低所得者であろう。彼女も周縁に位置する人物といえそうである。しかし彼女はスネルさんとはちがい，親切なおばあさんである。子どもたちが夏休みのアルバイトでカブぬきをした際，突然の雹に襲われ，オッレの発案でクリスティンに家に避難すると，彼女は手を打ち合わせ，子どもたちを歓迎しストーブに当たらせ温めてくれるのである。

親以外のおとなたちがぐるりと子どもたちを囲み，それぞれがその立場において，子どもたちの成長に寄与している。そこには理想的な地域の教育の姿があるといえよう。

4）個性豊かな子どもたち

主人公のリーサを中心に，6 名の子どもたちはそれぞれに個性的である。アストリッドの兄のグンナルをモデルにしていると思われる長兄のラッセは最年長ということもあり子どもたちのリーダーであり，横暴なところもあるが，いざという時には頼りになる。また，アイデアマンでいつも面白いことを考えている。小学校に入学するとき，かたときもじっとしていられなかったので，「就学適齢期でない」と判断されて 1 年間の就学猶予を受けてもいる。

リーサの次兄のボッセは算数が少々苦手で，マイペースな少年である。鳥の卵のコレクションをしていて，また，ぐらぐらしかけた乳歯を抜くことを恐れない。

ブリッタは勉強ができて，先生に用があるときブリッタに先生役を頼んでいったこともある。また実際家でもある。クリスマス前に学校ではクリスマスの本の注文をとる。ブリッタが注文した本を長い帰り道で少し読んでみたブリッタに，子どもたちがその続きを知りたがり，とうとうブリッタは全部読んでしまう。おかあさんには，クリスマスまで読まずにおきなさい，と言われていたにもかかわらずである。しかしブリッタは「どっちみち，クリスマスにもう一度読むから」問題ない，と言ってのける。

アンナはリーサといちばん気の合う友だちで，二人で空想を繰り広げる。春の小川で二人で過ごしているとき，まわりで飛び跳ねたカエルが「もし王子様だったら」と思いつき，もしかしたら王子様かもしれないカエルにここでキスをしなければ王子様は一生人間に戻れない，という強迫的な責任感にとりつかれて，キスを試みる。その一部始終を見ていたブリッタと男の子たちからは大いに笑われるのである。

オッレはこころやさしい男の子で，先述した通り，スネルさんが飼っていたスヴィップに愛情を傾ける。第 2 巻以降登場する妹のケルスティンのことを，年が離れて生まれた妹だけに，溺愛している。

5）子どもたちの対立と協働

男子対女子の対立がしばしば描かれる[13]。ほしぐさおきばに秘密基地をつくるときは，男子チーム，女子チームそれぞれでつくり，男子チームはその基地の地図をつくって女の子たちに秘密をほのめかし，女の子たちはそれをあばく。賢者の箱と称する宝ものを秘密の場所におさめたときも女の子たちにあばかれる。賢者の箱とは，たばこの箱に入った抜けた乳歯だった。それを見つけた女の子たちはそこに女中のアグダの古い入れ歯を入れておいたが，そこには男の子たちの素朴にして神聖な世界を破壊する残酷性があった。

2 つのチームにわかれて対立したり競い合ったりするが，協働もする。遊び小屋をつくったり，北屋敷の湖で遊ぶときは，危険な箇所があることを決して母親には伝えたいということで結束している。

6）子どもの育ちとそれを支える環境

アストリッドが「遊んで，遊んで，遊」んだ子ども時代をベースに描きだした子どもたちの遊びは，創意工夫，協働，問題解決，対立とその解決，恐怖刺激との対決，体力づくりなどをもたらす。おとなたちは子どもたちを見守り，過剰にならな

い程度に介入する。また，親の外側にいるおとなたち，すなわち，北屋敷のおじいさん，森のわきのクリスティン，靴屋のスネルさん，学校の先生といった人たちがぐるりと子どもたちをとりかこんでいる。

自然に囲まれたほぼ自給自足に近い生活は，今の日本の多くの子どもたちの現状とはかけ離れたものであるが，それでも，子どもが抱く関心，おとなに向ける感情と態度などに関して，今の子どもたちの世界と大いに重なり，刺激を与えるものであろう。また，レディメイドのおもちゃの魅惑に引っ張られがちな子どもたちの世界にも，やかまし村の子どもたちが行っていた遊びが位置づくことは，子どもの成長に大きな意味を持つ。親たちの態度と，親以外のおとなたちの教育への関与（無自覚的なものも含めて）も重要であり，こういった地域の教育力が具現化するような仕掛けをこれからの社会はつくっていく必要があるのではないかと考える。

おわりに

アストリッド・リンドグレーンの生涯と作品を概観しながら，アストリッドの創作の源泉，作品の魅力，代表作のひとつ『やかまし村』シリーズの子ども世界について，臨床心理学的視点から読み解いた。

アストリッド・リンドグレーンの主な作品（日本で出版されているもの）

『ブリット・マリーはただいま幸せ』1944 年（石井登志子訳　徳間書店　2003 年）
『サクランボたちの幸せの丘』1945 年（石井登志子訳　徳間書店　2007 年）
『長くつ下のピッピ』1945 年（大塚勇三訳　岩波書店　1964 年）
『ピッピ船にのる』1946 年（大塚勇三訳　岩波書店　1965 年）
『名探偵カッレくん』1946 年（尾崎義訳　岩波書店　1965 年）
『やかまし村の子どもたち』1948 年（大塚勇三訳　岩波書店　1965 年）
『ピッピ南の島へ』1948 年（大塚勇三訳　岩波書店　1965 年）
『やかまし村の春・夏・秋・冬』1949 年（大塚勇三訳　岩波書店　1965 年）
『親指こぞうニルス・カールソン』1949 年（大塚勇三訳　岩波書店　1974 年）
『カッレくんの冒険』1951 年（尾崎義訳　岩波書店　1965 年）
『やかまし村はいつもにぎやか』1952 年（大塚勇三訳　岩波書店　1965 年）
『名探偵カッレとスパイ団』1953 年（尾崎義訳　岩波書店　1965 年）
『ミオよわたしのミオ』1954 年（大塚勇三訳　岩波書店　1967 年）
『やねの上のカールソン』1955 年（大塚勇三訳　岩波書店　1965 年）
『さすらいの孤児ラスムス』1965 年（尾崎義訳　岩波書店　1965 年）
『ラスムスくん英雄になる』1957 年（尾崎義訳　岩波書店　1965 年）
『ちいさいロッタちゃん』1958 年（山室静訳　偕成社　1980 年）
『小さいきょうだい』1959 年（大塚勇三訳　岩波書店　1969 年）
『おもしろ荘の子どもたち』1960 年（石井登志子訳　岩波書店　1987 年）
『ロッタちゃんのひっこし』1961 年（山室静訳　偕成社　1966 年）
『やねの上のカールソンとびまわる』1962 年（大塚勇三訳　岩波書店　1975 年）
『エーミールと大どろぼう』1963 年（尾崎義訳　講談社　1972 年）
『わたしたちの島で』1964 年（尾崎義訳　岩波書店　1970 年）
『エーミールとねずみとり』1966 年（尾崎義訳　講談社　1972 年）
『やねの上のカールソンだいかつやく』1968 年（石井登志子訳　岩波書店　2007 年）
『エーミールと六十ぴきのざりがに』1970 年（小野寺百合子訳　講談社　1972 年）
『はるかな国の兄弟』1973 年（大塚勇三訳　岩波書店　1976 年）
『川のほとりのおもしろ荘』1976 年（石井登志子訳　岩波書店　1988 年）
『山賊のむすめローニャ』1981 年（大塚勇三訳　岩波書店　1982 年）
『エーミルと小さなイーダ』1984 年（さんぺいけいこ訳　岩波書店　1994 年）
『エーミルのいたずら 325 番』1985 年（さんぺいけいこ訳　岩波書店　1994 年）

『エーミルのクリスマス・パーティ』1996 年（さんぺいけいこ訳　岩波書店　1994 年）
『おもしろ荘のリサベット』1991 年（石井登志子訳　岩波書店　1992 年）
『クリスマスをまつリサベット』1993 年（石井登志子訳　岩波書店　1994 年）

註

1）ヤコブ・フォシェッル監修，石井登志子訳『愛蔵版アルバム　アストリッド・リンドグレーン』2007 岩波書店　Jacob Forsell　Astids Bilder　2007　Bokforlager Max Strom AB
特に断らなければ，本論のなかでアストリッドの生涯にふれるのは，この本を参照，引用している。
2）河合隼雄『子どもの本を読む』1978 年　光村図書
3）1）に同じ。
4）1）に同じ。
5）シャスティーン・ユンググレーン著　うらたあつこ訳『遊んで，遊んで，遊びました』2005　ラトルズ　Kerstin Ljunggren　Las om Astrid Lindgren　1992　Raben&Sjogren Bokfolag
6）クリスティーナ・ビヨルク文　エヴァ・エリクソン絵　石井登志子訳『遊んで　遊んで　リンドグレーンの子ども時代』2007　岩波書店　Christina Bjork & Eva Erikkson　Astrids Äventyr　Innan hon blev Astrid Lindgren　2007　Raben&Sjogren Bokfolag
7）アストリッド・リンドグレーン　石井登志子訳　装画荒井良二　『暴力は絶対だめ！』2015　岩波書店　Astrid Lindgren　Aldrig Vald!　1978　Raben&Sjogren Bokfolag
8）6）に同じ。
9）https://www.iwanami.co.jp/shoubun70/about/（2020 年 10 月 9 日最終確認）
10）7）に同じ。
11）『長くつ下のピッピの世界展　アストリッド・リンドグレーンが描く北欧の暮らしと子どもたち』図録 2018 年
12）TOKYO FM　パナソニック・メロディアスライブラリー 2020 年 3 月 29 日での小川洋子の発言
13）青木真理「リンドグレーン『やかまし村』にみる子ども像」『臨床的知の探究　上』（1988 年　創元社）の中でこの点について述べている。

（2020 年 10 月 8 日受理）

Astrid Lindgren's Life and Works
—— From a Viewpoint of Clinical Psychology ——

AOKI Mari

Astrid Lindgen is a famous writer of chldren's book born in Sweden.　Her works have been read all over the world.　In this paper I described her life and the relationship of her life and her works from a clinical psychological viewpoint.　I would like to emphase her sad departure from her hometown should be done in order to live her own life out of her child life as a "daughter of father."

Furthermore, here in this paper, I would like to consider what is implied in her works "Children of Noisy Village" series.